

【論考】

# 留学・グローバル政策を考える際の10の論点

－「評価」という視座を中心に－

Discussion Points in Considering Policies of Globalization and Student Mobility at University Level with a Focus on “Evaluation”

立命館大学 教授／国際部副部長 山中 司

YAMANAKA Tsukasa

(Professor/Director of International Division, Ritsumeikan University)

キーワード：留学プログラム、評価論、プログラム評価、グローバル政策、プラグマティズム

## 1. はじめに

大学の国際化やグローバル政策の必要性が叫ばれて久しい。筆者自身も大学の国際化に長く携わり、新規の留学プログラムの開発をはじめ、種々のグローバル施策に取り組んできた。しかしその中で痛感させられてきたことは、これらにベスト・アンサー、ベスト・ソリューションは「ない」ということである。このことは留学プログラムの評価とて同じである。教育という文脈で物事に取り組む限り、「十把一絡げ」はありえず、万能な処方箋も存在しない。仮にそうしたものがあると我々が想定してしまった時点で、グローバル政策は学生にとって傲慢なものに映り、制度疲労を起こして魅力のないものとなるだろう。

本稿では自らへの戒めも含め、大学が留学政策を考えそれを実行に移す際、10の考えるべき点についてまとめ提示した。本論考にあたっては、あえて「評価」という観点を軸に述べることにした。理論、実践の双方から、読者に様々なレベルで「気づき」を得て頂くことを目指した。

## 2. 留学政策を策定、実行するにあたって検討すべき10の論点

### (1) 評価されるべきは学生だけか？ プログラム評価の視座は欠けていないか？

「プログラム評価(program evaluation: Rossiほか 2003)」という言葉がある。これは、プログラムが持つ理念・理論、ニーズの適切な把握、実施のプロセス、アウトプット及び近位・遠位アウトカムを評価するものであり、昨今のIR(Institutional Research)の隆盛に伴って国内でも徐々に着目さ

れつつあるが、未だ日本の大学風土には十分に定着していない概念である。評価といえば、常に学生の評価が第一義的に扱われ、彼らは常に評価の裁定を待つ側に立たされる。しかし、本来的に評価されるべきなのは、留学政策そのものではないのか。以下2点を指摘したい。

1点目の指摘は次の通りである。Rossi ほかによると、プログラム評価の視点に立つならば、ある政策の結果、例えば大学のあるグローバル政策が「失敗」に終わった場合、その理由は2つあるという。1つは「実施上の失敗(implementation failure)」である。この場合、それは大学のグローバル政策が学生に十分理解されず、結果として期待通りの成果を生まないことを意味するが、その理由として学生の留学に対するモチベーションが低いことや、学生の認知や関心が低いなど、それらを十分に喚起できなかった実施面での失敗を挙げることもできるだろう。これらはいわば、喚起に対して期待通りの反応を見せなかったとして、政策の失敗の一部を、学生に帰してしまうことを意味する。

またプログラム評価には、もう1つの失敗の原因があるとする。それは「理論上の失敗(theory failure)」である。根本的な土台に失敗があった際、それをどんなに上手く実施しようとも成功するはずがない。つまりこの場合、責められるべきはプログラムや政策そのものであり、学生ではないのである。仮に我々が実施の評価だけに目が行き、根本的なグローバル化施策に関する理論やプログラムの評価をなおざりにするならば、膨大なコストを無駄にしている可能性すら否めない。大学が学生を評価するのは構わない。しかしそれと同等かそれ以上に、大学そのものの政策や考え方が厳しく評価されなければいけない。そうでなければ学生にとってフェアではなく、真摯さに欠けるのではないか。

2点目の指摘として、少なくとも国内大学のグローバル政策に関して、客観的な数値や施策の有無を除き、汎用的に大学間で用いることのできるアウトカム評価の指標が存在しないことである。これによる最大の問題は、各大学が実施する政策のもとで学生がどのように変わり成長したのか、独自の取り組みによる成果が正しく評価されないことにある。無論それぞれの大学や組織で、留学の参加前後の比較や、経年比較、対称群を操作することによる効果検証などを行うことはあるが、それらが独自のスケールによるためグローバルな比較ができず、また体系的なIR(Institutional Research)の発想を欠くことも多いことからアドホック的に行われていることが実情である。その結果、表面的で見えやすい数値が比較対象としてのアウトカムの指標とならざるを得ず、そうなると必然的に偏差値の高い大学であったり、初めからグローバルな特性を持った学生を入学させた大学や学部が圧倒的に有利になる。これもまたフェアではない。グローバル政策は、各大学や学部組織が独自に開発、展開する取り組みこそが評価されるべきであり、それによっていかに学生が変わり、伸びたか、さらにいうならば「大化け」したかということこそが問われるべきではなからうか。この意味で、評価は一定程度、機関ごとに個別具体的にならざるを得ないだろう。

このような、現状様々に存在する評価のアンフェアネスを少しでも解消し、評価を一般的、常識的な感覚に少しでも近づけるべきである。繰り返すが、学生ばかりが評価されるべきではない。この点

において、「プログラム評価」の論点はどれだけ強調してもし過ぎるものではない。当該議論の欠如は、各大学の留学政策に対して極めて深刻な影響をもたらすだろう。

## (2) 評価の虚構性を前提とし、同時にリアリティを追求しているか？

筆者の専門は外国語教育である。したがって1つのケースとして、外国語教育における評価の論点を述べ、グローバル政策における含意を提示したい。

外国語教育において、評価はフィクションでしかない。Chomsky 言語学(1965)が実際のコミュニケーションにおける発話行為を含む、いわゆる「言語運用(linguistic performance)」部分を扱わないことを堂々と宣言し、それに対する反動として Hymes(1972)による「コミュニケーション能力(communicative competence)」が提示された。この概念を応用言語学が重視し、その後 DBP プロジェクト(The Development of Bilingual Proficiency project)として、その実証研究を行なったが、結果的にコミュニケーション能力の実態は科学的に掴めなかったのである(柳瀬 2006: 201-3)。ただし、外国語教育における評価モデルは、フィクションでありつつも、「コンセンサスに基づくフィクション(金谷 2003: 81)」である。誰しも言語能力が reading、writing、listening、speaking の4技能に綺麗に分かれるわけでも、それを足し合わせれば漏れなく言語能力になるわけではないことは分かっているはずである。しかし、それにもかかわらず、私たちはある程度の妥当性を4技能の尺度に感じるわけであり、それで現に多くの評価テストが行われ、各技能別に下位スコアが示される。

この外国語分野における現象は、教育分野における評価の虚構性と、その中にさえ存在するリアリティの感覚を示している。これは、留学施策に客観的かつ科学的な評価など存在し得ず、しかし皆に受け入れられる、一定程度妥当性があり、実感に沿う評価モデルがあり得ることを示唆する。グローバル政策に携わる者は、評価の多元性・相対性を謙虚に受け入れ、一方で学生ができるだけ納得できる評価のリアリティを追求するべきである。無論、容易なことではないが、両者はトレードオフでもないはずである。

## (3) SINK or SWIM は教育か？

上記に同じく、外国語教育に寄せて問題提起をしたい。究極の外国語能力の獲得法は、「SINK or SWIM(泳ぐか、それとも泳げずに溺れるか)」であろう。これは典型的には、ターゲット言語で話されている国や地域に一人放り出され、その言語が話せなければ生きてすらいけない、そんな最も過酷な環境下に置かれた場合などがそれに該当するだろう。しかし例えば、かつての幕末の大黒屋光太夫<sup>1</sup>しかり、ジョン万次郎<sup>2</sup>しかり、漂流して流れ着いたロシアやアメリカで、現地で見事な外国語能力を獲

<sup>1</sup> (1751-1828)

<sup>2</sup> (1827-1898)

得して帰国した。これは究極の外国語教育の形であり、こうした必然性に苛まれた言語獲得の苦勞は想像を絶するものであっただろう。しかしこれほど効果的で実践的な外国語教育も他にあるまい。

ただしここで注意したいのは、SINK or SWIM は、外国語能力の一つの獲得の形ではあったとしても、「果たしてこれは教育なのか?」という問いである。筆者の答えは否である。教育とは、社会との接点が重視されることは望ましいが、一方でセーフティネットが確保され、あくまでも「失敗が許される、安心して取り組める空間」であるべきだ。そう考えるならば、単に現地に放り出し、過酷な環境のなすがままに学生が翻弄されるのが、大学としての留学プログラムのあるべき姿だとは考えにくい。この議論を敷衍するならば、留学プログラムにおけるセーフティネットとは何か、何を支援でき、どうしたら学生は安心してくれるのか。評価とは直接リンクしないが、留学プログラムとしての根本的妥当性を検討する上で、そして教育論として、これらは考察すべき重要な論点である。

#### (4) 評価の診断性を追求しているか? 到達度のみを検証していないか?

評価と一口に言っても、その方法にはいくつかある。ここでは評価論に深入りするつもりはないが、留学に対する評価はあくまで「診断的評価(diagnostic assessment)」であることを主張したい。診断的評価を考える際、「到達度テスト(achievement test)」との違いを考えてみると分かりやすい。例えば前者は出題範囲のない実力テスト、後者は出題範囲が決まっている中間や期末テストとなる。診断的評価は、あくまで現時点での被評価者(学生・生徒)の状態を浮き彫りにすることを目的とし、到達度テストは、一定の教示活動や経験を経て、獲得が期待される能力や知識を評価するもので、到達度テストの場合、当然スコアが高い方が良い。

しかし留学によって得られるものは、範囲の決まった限定的な知識を問うテストとは異なる。言わば予定調和であったり(正確に)予測可能なものではない。思わぬ能力が伸長したり、留学中に厳しい現実を突きつけられ、己の価値観が大いに揺さぶられることで、一旦は様々な数値が軒並み下がることも十分に有り得る。この場合、数値の下降は能力の下降を必ずしも意味しない。慎重な解釈が必要であり、安易に数値の上下で一喜一憂するべきではない。

留学による成長は、当人に実感として伴われることが多い。そこで、評価指標がこれらの実感を後追いするものでしかないならば、効果は限定的であると言わざるを得ない。評価の期待される真の役割は、留学した当人でも気づけていない様々な変化を、まさに診断的に教示するものであり、こうした情報提供の機能こそ重視されるべきである。

繰り返すが、到達度で評価する留学成果の可視化は、その限定的な一部でしかなく、ある意味では、留学経験者の成長を矮小化していることに注意すべきである。プログラム担当者は、評価結果がもたらす診断的情報を冷静に解釈し、参加者一人一人が留学によって得られた効果や気づきを、最大限に「拡声(amplify)」させる方略(事前/事後講義の仕組みなど)を考えるべきである。

### (5) いつの間にか言語能力だけで留学プログラム群を区分けしていないか？

自戒を込めて、そしてかなりの程度幅広く見られる現象として、留学プログラムのレベルの濃淡の主要な弁別軸を、言語能力に置いている場合が少なくない。結果として、言語能力が低い学生には、期間も、行き先も、内容も、選択肢にはじめから大幅な制限が設けられており、一方で言語能力が高い学生には、幅広い選択肢の中から留学プログラムを選択することができる。ここでは言語能力を暫定的に英語能力と置き換え議論するが、グローバル社会で活躍できる能力を涵養することを考える際、なぜ言語能力が低いことが足枷になってしまうのか。無論、グローバル人材に高度の英語能力が期待されることは疑いない事実であろう。しかし、英語ができるようになって「から」しか、グローバルに活躍することができないのか。英語のできない人間はグローバル化してはいけないのか。

「もっと英語ができるようになってから」という完璧主義的な発想はこと外国語習得にとって危険である。なぜなら、完璧な状態など蜃気楼でしかなく、いつまで経っても練習しているうちは、本番で発揮される力は鍛錬されないからである。外国語教育を専門とする身であるからこそあえて強調したいが、英語能力とグローバル力はイコールではない。一定の相関があることは否定しないが、直接的な因果関係はない。また、個人に帰する英語能力は一時的なものでしかない。ある学生が、今たとえ英語ができなくても、それは彼(彼女)が未来永劫、英語能力の下位層に属することを意味しない。英語は使い続ければ必ずできるようになるし、グローバルの経験を積むことで、副産物的に外国語能力が備わることは理想的ですらある。

外国語能力に応じて留学プログラムをカテゴライズするのは、プログラムの運営側にとっての「やり易さ」を優先している可能性がある。外国語の得手不得手に関係なく、グローバルな経験を積みたい学生は多い。「いきなり」で良いのである。常に本番が経験できる留学プログラムこそ目指されるべきであり、たとえ言語能力が低くとも、言語訓練に特化するだけの留学プログラムは、本来の留学の効果の多くを削ぎ落としてしまう可能性がある。先の SINK or SWIM のような行き過ぎた留学体験は問題であるとしても、多少の荒療治こそ留学の醍醐味である。コンフォートゾーンを断ち切る意味でも「積み上げ式」の発想を無条件に前提とするべきではない。

### (6) 変化した数値(アウトプット)にこだわるあまり、本来の成果(アウトカム)が見落とされていないか？

個々の留学プログラムの効果を測定するため、我々は暗黙裡に、測れるものに注目する。評価指標を用いるのもそのためであり、アンケートや言語能力スコアの前後の変化を見るのもそのためである。しかし、これらは言わばアウトプットを評価するだけのものであり、測れないもの、測りにくいものをも含む、より広義のアウトカムを評価してはいない。評価モデルにベストは存在せず、世界中に存

在するいかなる評価実践も、その全てが一長一短であり、「これをやっておけば問題ない」という黄金律は存在しない。考えれば当たり前のことである。

測れるものを測ろうとする態度は、測れないものを測ろうとしないことを自動的に意味しない。無論容易なことではないが、測れないものも何とかして測り、総合的に把握し評価しようとする態度は重要である。繰り返すが、いかなる評価モデルも、必ず漏れがあり、留学による効果を全てすくい上げているわけではない。安易な数値主義は、当事者の実感との乖離を招き、信頼されない留学プログラムを生み出すこと結果に陥るだろう。ではどうすべきか。回答は容易ではない。しかし、個人への聞き取りや、中長期的な観点から見た質的調査、様々なデータの重ね合わせによるトライアングレーションなど、手間が掛かることだけはおそらく確かであろう。

#### (7) プログラムは互恵的であり、双方のメリットを追求しているか？

本論点は直接、留学の評価とは関連しないが、プログラムを持続可能なものとしながら、発展させる上で、この論点は大きな意味を持つ。留学プログラムの場合、受け入れ先機関に対し学生派遣を行うわけであるが、その関係は互恵的、つまり win-win でなければいけない。通常は、送り出す側は派遣学生が留学による経験を得る一方、受け入れ側は対価として金銭的報酬を得る。当然これはある意味で互恵的關係であるが、それだけでは受け入れ側にとってのメリットは十分ではない。目指すべきは、受け入れ先の教育機関にとって、派遣元大学とどうしても関係を続けたいと思わせる「何か」を追い求め続けるべきである。

具体的には、受け入れ先大学の学生にとって「も」、当該のプログラムが学びの機会となるかどうか重要である。大抵の場合、受け入れ先大学学生の何名かをバディ・メンター・リーダーなどとして選び、アルバイトとして一定の任務をさせることになるが、このような金銭的関係の繋がりであるだけならば、原則的に契約以上のコミットメントは期待できない。しかし、受け入れ側の学生にとっても、派遣する大学の留学プログラムを通して学べる要素、例えば異文化の理解であったり、自文化の発見であったり、その他様々な教育、研究、調査活動に繋がる要素は存在する。こうした側面を考慮に入れた留学プログラムをはじめからコンセプトに入れて開発することで、派遣先大学側の学生は、現地の大学に科目を提起してもらい、単位となることでプログラムの協力にコミットするのが一つの理想形である。現に筆者は、派遣先大学の学生が留学生を受け入れ、コミュニケーションを取り、彼らと共にフィールドワークなどを行うことで、多くの気づきを得、認識を改め、深い学びに達した姿を多々見てきた。こうすることで、単に(一方的に)与える側と(一方的に)与えられる側の関係から、互いに学び、刺激を与えられる水平的関係となる。留学する側も単に受動的に学ぶだけではない、自身の現地での能動的な貢献を考えるようになり、結果的にプログラムが活性化する。間接的にはあるが、こうした留学プログラムは、受け入れる側の機関にとってメリットとなり、派遣元大学に対す

る評価の向上に寄与するであろう。

#### (8) 有効な新政策を矢継ぎ早に打ち出しているか？

クリステンセン(2000)の「イノベーションのジレンマ」の説明を待つまでもなく、制度疲労はどの分野にも必然的に生じ、これは留学プログラムとて同様である。一度「うまく行く」留学プログラムを動かすと、ついその成功体験の余韻に浸ってしまい、そのプログラムを永らえることに固執する。その結果、社会が急速に変化しているにも関わらず、いつまでも従来の成功体験に縋ってしまう。時が変われば成功モデルは陳腐化し、もはや学生のニーズとは乖離した失敗モデルとなる。

重要なことは、いかなる成功体験にも安住することなく、刻々と変化する社会からの要請、学生の気質、ニーズを的確に掴み、大学側が健全な自己否定、健全な自己批判をし続けることである。留学プログラムを受ける側、すなわち学生の立場から見れば、改革が盛んに行われていることは良い印象を与える。自分たちのことを考え、様々に手を打ってくれているように映るからである。しかしそうした印象は、改革をし続けなければ受け手にはなかなか伝わらない。

イノベーションのジレンマが示唆することは、改革は後発組の方が有利だということである。現在の成功と、未来の改革は果たしてトレードオフなのか。難しい問題であるが、少なくともこうした問題意識はもっておくべきであろう。

#### (9) 学生を実験台と思ったり、単なるコントロール群のサンプルと見ていないか？

学生は一人一人顔も性格も違う掛け替えのない存在であり、テストサンプルではない。あくまで教育機関として留学プログラムを実践する限りにおいて、教育に携わる者が良いと思う教育実践を、意図的に特定グループには施さず、コントロールグループとして比較のために使うことは倫理的に許されるべきではない。しかし同時にこれが、研究の実証性の足枷ともなるわけであるが、やはり教育である限り、学生は実験台にするべきではない。教育に携わる者であれば、一人一人の学生の顔が浮かんで来ないか。彼らに対し、教育者が意図的に悪いトリートメントを施すことなど決してできないはずである。

言うまでもないが、論文の点数稼ぎのために、留学プログラムが実験されることもあってはならない。プログラムに参加する学生が最も益を得られることこそ第一義的に重要なことであり、そのために、研究としての妥当性が損なわれたり、科学的な実証性に欠けることになろうとも、それは喜んで甘受すべきである。

#### (10) 評価にプラグマティズムはあるか？

これも、直接的な評価論との関係を持たないが、考え方やスタンスとして、少なくとも筆者は持つ

ておいた方が良く考える点である。先に述べた通り、一人一人異なった背景を持つ多様な学生が留学に行く。留学プログラム設計時に想定した見込みと異なること、時を経て異なってくることは多く、理想とは乖離することは日常茶飯事ではなかろうか。大学で行う留学施策はあくまで教育実践としての一環であり、繰り返すが学生は実験台ではない。学生の留学以外の他の要素(例えば、年齢を重ねること、それぞれの学部での学び、アルバイト経験など)を一定にコントロールした対照群など設定すべきではないし、そもそも人間を相手にしている限りにおいて、そのようなことは不可能である。つまり、留学を含むグローバル政策は決して理想的にはいかないのである。そうした現状を前に、我々はどう振舞うべきか。

ノイラートの船の如く、我々は積極的に妥協を引き受けるべきであり、できないことを嘆く代わりに、できることに積極的に着目し、それに精一杯取り組むべきである(山中 2019)。プラグマティズムは徹底的な現実主義の思想である。状態や属性に着目する代わりに、具体的な行動に着目する。留学とは一つの行為であり、そこで学生本人が「何をしたか」が重要であり、「(もともと)何であるか」は重要ではない。理想的な状況ではない留学先で、何を割り切り、何に腹を括って、どんな具体的な行動に打って出られるか。学んでから実践するのではなく、実践しながら学ぶことができるか。まさにプラグマティックに振る舞えるかどうかは留学の真価だと筆者は考える。

評価についても同様である。先述した通り、いかなる評価モデルも万能ではない。究極的な解決策を目指すよりも、現実的に役立つことが評価にとっては重要であり、それを疎かにすれば評価は皆にとって単なる負担になるだけである。プラグマティックな評価論が目指されるべきである。

### 3. おわりに

評価の問題は難しい。主観的な要素が入れば入るほど、そして数値的な変換が難しいパフォーマンスに依存する部分が多くなれば多くなるほど、客観的に説明できる部分が少なくなり、反対派は批判が容易になる。しかし本来、留学プログラムは生身の人間が経験するものであり、その全ての学びを変数化することなどできるはずがない。普遍的な尺度も存在するはずがない。一人一人の人間が違うからである。

しかし評価は、難題ではあっても、諦めるべきテーマではない。測れるところだけを計ってはいけない。あくまで正面突破で、等身大の学生一人一人を、丸ごと評価することを諦めるべきではない。もちろんこれは簡単なことではなく、手間もかかることだろう。同じやり方が再帰的に通用するわけでもないだろう。

日本語で「評価」という言葉を考えた際、「〇〇さんは評価できる」という表現に典型のように、評価は基本的に肯定的な文脈で用いる。つまり、評価とは肯定評価であり、一人一人の良いところ、伸ばすべき長所について言及するのが、日本式の評価論の根底にあると筆者は信じる。評価を通して、

学生の自己肯定感の醸成を考えるべきである。また評価のウォッシュバック効果として、グローバル社会で活躍するための「しなやかさ」と「たくましさ」が、政策の恩恵を受ける全ての学生に身につけられるよう目指されることを望む。

## 参考文献

Chomsky, N. (1965). *Aspects of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Hymes, D. H. (1972). On Communicative Competence, In J.B. Pride & J. Holmes (eds).

*Sociolinguistics. Selected Readings*. Harmondsworth: Penguin, pp. 269–293.

Rossi, P. H., Freeman, H. E., & Lipsey, M. (2003). *Evaluation: A Systematic Approach* (7th ed.). Thousand Oaks, CA: Sage.

金谷 憲 編著 (2003) 『英語教育評価論：英語教育における評価行動を科学する』 河源社

クリステンセン, クレイトン (2000) 『イノベーションのジレンマ：技術革新が巨大企業を滅ぼすとき』 伊豆原 弓 訳, 翔泳社

柳瀬 陽介 (2006) 『第二言語コミュニケーション力に関する理論的考察：英語教育内容への指針』

溪水社

山中 司 (2019) 『自分を肯定して生きる：プラグマティックな生き方入門』 海竜社